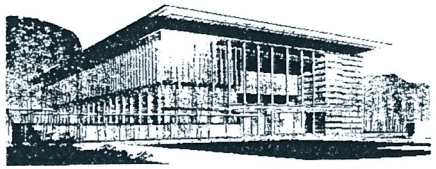
政界スキャン

連載……353

日本が米国の「警察犬」になる日



先日この欄の「自民党リベラル『たった一人』の反乱」で紹介した衆院議員村上誠一郎の励ます会（六月二十日）を都内のホテルにのぞいた。

この種の会はいろいろ見てきたつもりだったが、本人の巨軀同様、異色の進行であった。通常は激励に駆けつける党三役や閣僚、派閥領袖たちの姿は一人もない。同僚議員もごくわずか。村上の党内での孤立した立場が透けて見える。当選同期だという元参院副議長山東昭子がかろうじて壇上に立ち村上の政策通ぶりを誉めたが、それも「政界では1＋1が2でないこともある」と述べ、正論ばかり吐く村上を暗に牽制する始末だった。

そんなことはどこ吹く風、来賓挨拶が終わると、村上が待ってましたとばかりに大きな壇上スクリーンを使って政策講談会を始めたのだ。

曰く。「日本の目下の最大政治課題は、集団的自衛権にあらず。財政、外交、教育にあり……」。

スクリーンには、この三テーマについて次から次へデータとグラフが映され、村上の解説が延々と続く。確かによくまとまっているし日本の置かれたのっぴきならぬ現状がよく伝わってくるが、普通の励ます会であれば、こんな政策勉強会みたいなやり方はしない。励まされる議員の話は、気の利いた決意表明程度にとどめ、後は酒食と名刺交換のおいしい時間帯にするのが常である。何よりも万円単位の券を買って集まってくれた貴重な支持者を立たせたまま、乾杯も食事もお預けでおのれの政策演説を三十分以上も聞かせ続けるのは見たこともない。

ただ、驚くべきは、それに聞き入る聴衆たちの辛抱強さと集中力であり、この人たちがただひたすら政策を語るのみの村上をこれまで九期、二十八年当選させ続けてきた、という事実である。

別に村上を贔屓するわけではない。こういう世界がまだ残っていたことに安堵したのだ。自民党内に付和雷同型の安倍（晋三首相）ユーゲントみたいな連中が増え、リベラルな政策職人が消えつつあることを危惧するものである。与謝野馨、加藤紘一しかり、である。

＊

自民党国防族のドンであった山崎拓もその一人である。

加藤や小泉純一郎とYKKトリオを組んで、時の覇者であった小沢一郎を包囲することで経世会支配を打破、ある時は乱にはやる加藤と行動を共にし、またある時は首相になった小泉を幹事長として支えた。自らは女性問題で首相の座を諦めたが、ポスト冷戦後の日本の安保、防衛政策全般にわたってにらみをきかせてきた自負がある。引退後二年、なお派閥事務所を永田町に置く山崎に聞いた。解釈改憲による集団的自衛権の行使容認議論をどう見るか。

「僕が現場におれば反対しますよ。解釈改憲は、僕がいたからできなかった。僕が幹事長、外交や安全保障の調査会長をつとめ、今の石破（茂幹事長）とか、高村（正彦副総裁）のようなことを一人でしていた。何度もあの問題が提起されたが、僕は言下に解釈改憲はダメだと否定してきたんです」

「なぜって？　時々の政権によって最高法規である憲法解釈を変えるということは、法治国家としていかにもまずい。中谷元（元防衛庁長官、自公協議の自民側メンバー）なんかは僕に同調していた。今回は彼も意見が変わった。僕がいないからですよ。党内の権力バランスですよ。つまるところ公明党が悪いのではなくて、自民党の中に安倍がやろうとしていることに対するアンチテーゼがない。選挙制度の影響で、自民党公認がない限り当選できない議員ばかり。僕らは中選挙区で無所属で当選してきた人間です。そういうものがいなくなった」

「安倍自身は名誉欲でしょう。歴代政権でできなかったことを俺の力で認めるようにした。祖父が安保改定をやった。その孫なんだ、という自負心。それが何をもたらすかということを彼は深く考えてない。つまり、防衛政策の大転換になる。専守防衛をやめ、海外派兵を認める、ということです。派兵と従来の派遣とは大違いだ」

山崎によれば、過去に彼が関わった周辺事態法（一九九九年）、テロ（二〇〇一年）、イラク（〇三年）特措法制定の時にも米側は、アジア太平洋のより広い地域で、機雷掃海、武器、弾薬輸送という、より直接的な自衛隊の貢献を求めてきた。それを集団的自衛権は行使できない、という建前で抑え込み、海外での武力行使につながる事態を極力回避してきたのが自民リベラルの知恵だった。

そのリベラル勢力が雲散霧消した。そして、解釈改憲がまさに成立せんとしている。日本の外交安保政策の何がどう変わるのか。

「ある意味、米国は、老いぼれた警察官です。まだまだ世界の警察官として振る舞いたい気持ちはあるが、一方で国力低下、軍事費削減で中国からは足元を見られている。そこで、この際日本の自衛隊を使おうと。老いぼれた警察官だから、連れて歩く警察犬が必要なんです。日本の自衛隊は警察犬になろうとしているんです。それに安倍が気づいていない」

犬のたとえで言えば、一九六六年、椎名悦三郎外相が米の核抑止力について「（日本にとっては）番犬のようなもの」と答弁したことがあった。大国米国を番犬として使いこなすのと、老国の警察犬として奉仕していくのとは天と地ほどの差ではないか。ロイヤリティーの高い忠犬として、どこまで飼い主の指令に振り回されるかわかったものではない。今回の政策転換の持つ本質的意味を安倍はじめ気づいている人が少ないというのが山崎の懸念だ。

＊

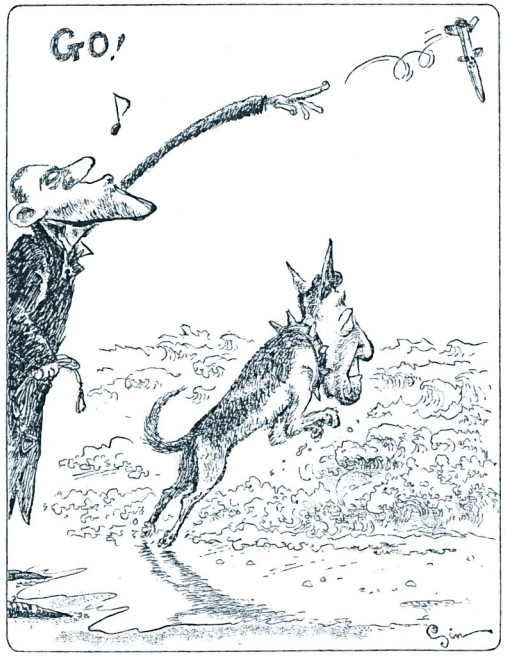
山崎はさらに二つ予言した。

「このことは日米安保改定問題に直結する。なぜならば日本が米国に対して基地提供する根拠は集団的自衛権を行使できないからであって、普通に行使できるようになることは、基地提供しませんと同義だ。いずれ沖縄から基地提供の義務はなくなったという声が出てくるだろう」

「安倍は日中戦争辞せず、という構えではないか。少なくとも中国側は安倍の腹はそこだと思っている。ある意味、米国もそこを恐れている。だが、日本は絶対に勝たんですよ。鄧小平がいみじくも言っている。互いに一億人ずつ殺しあえば、日本人は一人もいなくなるが、中国には十三億残ると」

安倍さんよ。この経験に裏打ちされた見立てにどう反論する？

（敬称略）



え・山田紳